順天堂史

佐藤 尚中 伝 (6)

A Biography of Shōchū SATŌ, the Founder of
the Juntendo Hospital in Tokyo (6)

小 川 鼎 三*
TEIZO OGAWA, M.D.

佐倉帰着後の尚中

尚中は1年余りの長崎留学を終えて、文久2年(1862)の3月14日に佐倉に戻ったが、その後に何をしたかを調べてみる。妻サダは健康はすぐれなかったかも知れないが、尚中が長崎でひどく妻の病気を案じて金井右膳に頼み書いたごとく、存命して彼を迎えたのであった。

また留守のあいだ養父の泰然は不本意ながら順天堂の業務と佐倉藩医としての仕事をうけもったのだが、その泰然は尚中の帰着後ひと月も経たない4月12日の早朝に佐倉を去り、まず江戸薬研堀の林洞海のもとに移って、さらに6月の末か7月の初めに横浜に移ったことが佐倉藩の記録によりわかる。

また尚中は文久2年の6月6日に5人扶持が加えられて、都合20人扶持となり、席は勘定頭となった。すなわち藩医としてもいっそう責任が重くなるが、彼は同時に順天堂の立て直しにも全力を尽していたであろう。その上に長崎を去るときボンベから贈られたストロメールの外科書などを訳述する仕事も、後に述べる「斯篤魯黙児砲痕論」と「外科医法」の出版年月をみるとこのころ盛んにやっていたにちがいない。

いま谷中墓地に建つ尚中先生の顕彰碑に宮内文学兼大学教授の川田剛が当時の尚中をどう書いているか調べてみると、長崎留学でボンベの信任を大いに博したところで、

「学成り東帰するに及び、(ボンベが)贈けするに外科書数部を以てす。みな欧州名医の著す所なり、(尚中)先生熟読玩味大いに得る所有り。乃ち済衆精舎を築き、七科を分て業を授く。別にまた一舎を設け病者を延る。是に於て弟子ますます進み、治を乞うもの麁集す。藩主また先生の議を用い、医政を更革し、病院及び衛生館を建て、凡そ医に禄するものみな洋方を主とす。因りて先生を以て一等医となし、之を総管せしめ、進めて側用人格に班し、給を増し三十口糧とす、異数なり。既にして覇府(幕府のこと)その名を聞き、辟(徴の意である)して医員と為さんと欲す。固辞して往かず」(原漢文、円カッコ内は筆者付記)

従来の伝記者の多くはこの碑文に基いて尚中の事績を述べているが、その大綱は正しいとしても吟味を要する点が少なくない。

まず「済衆精舎を築き」とあるのは何か、精舎(セイジャと訓んで学校の意、ショウジャと訓むのは仏教の用語で寺院の意)がそれまでの順天堂といかなる関係にあるのかが明らかでない、同じもので名前を変えたとなると、「築き」は増築の意味であろうか。済衆という言葉は後に尚中がニーマイヤーの内科書を訳して済衆録と題したごとく、彼の好んで用いたものである。最近私どもは佐藤要博士(尚中の孫)から手紙をいただいたが、その中に中国の名医龔廷賢(きょう・ていけん)の著「万病回春」(1587)の中に医家十要と題した医者的心掛10項目を書いた文があり、その第1項に「博施済衆」の句があり、これが尚中の「済衆」と何かのつながりをもつのでないかと教示された。尚中の済衆精舎が実在したことは慶応元年に出版のストロメール砲痕論と外科医法をみ

* 順天堂大学医学部客員教授(医史学)
Department of Medical History, Professor of
Juntendo University, School of Medicine
(Jul. 19, 1973 受付)

でも明瞭である。両書とも「済衆精舎蔵」とありその下に「順天堂」の朱印が押されている。明治4年に複製(増刷か)された外科医法ではその朱印が「佐倉順天堂蔵板」と変っている。

また「別にまた一舎を設け病者を延る」も説明を要する点で、これも順天堂の増築を意味するのではあるまいか。

藩医としての尚中

文久2年6月に20人扶持となった尚中は佐倉藩医としても重要な地位にあった。文久2年5月には内田主殿頭(小見川藩)の病気をみるため江戸に行ったし、同年9月には堀田兵庫の重症(9月22日死)のため奔走したことが佐倉藩の記録によりわかる。前藩主の堀田正睦は安政5年6月に老中を罷免されてから、さらに蟄居を命ぜられて文久3年5月以後は佐倉城内にあり、文久4年(元治元年、1864)の正月には重症となっていた。尚中も侍医の一人としてその治療に当たったが、「御医師日記」(いま佐倉市の浜野正治氏が所蔵されており、篠丸頼彦氏がその中から佐藤泰然と尚中に関係ある記事を抜粋されて順天堂史の資料として提出されたもの)によると、その正月5日に尚中は他の主な藩医3名(浜野了元、倉次元意、樋口文泰と共に大殿様(堀田正睦)の病気に関して「今日より御用引仰せ付けられ」ている。御用引の意味が不明だが、御用を中止した意味かとおもう。大殿様の重病のとき侍医の職務中止はおかしいが、ちょうどそのとき正睦の病床に侍するため横浜から佐藤泰然が正月6日に佐倉に駆けつけたことが注目される。

この時の泰然の佐倉滞在がおそらく泰然と尚中の和解に大いに役だったと考える。既述のごとくそれまでは泰然の意志に反した尚中の長崎留学が主な原因となり両者のあいだはとかく円滑さを欠いたのである。堀田正睦はこの年の3月21日に佐倉城内の松山御殿において没したが、すぐには喪を發せず、3月29日に幕府から彼の蟄居が解かれた上で、正式には4月5日逝去と發表された。

さらに続いて御医師日記をみると、元治元年

(1864)の8月29日に尚中は「佐原表江出張御人数」を見回りのため立帰り仰付けられ、かの地に立出したとある。そして9月7日に彼は佐原での御用が相済み帰宅した。水戸藩の天狗党の騒ぎのためであろう。前に「佐藤泰然伝」で述べた元治元年11月24日に横浜の泰然が佐倉の尚中であてて書いた手紙の冒頭に「常州御出張」の佐倉藩の将兵が評判よいので、自分は喜んでいるとあるのと内容が合っている。

また元治2年(慶応元年、1865)の正月22日の項に尚中は去る10日朝から藩主堀田正倫のお供をして江戸にゆき、御用相済み今日帰宅とある。さらに慶応元年の9月6日に尚中は藩主のお供をして京都にでかけて、同月28日に到着した。10月9日に佐倉藩は大手御門の警衛を命ぜられたとある。しかし慶応2年正月2日の項に去月18日、宮内中納言より佐倉藩主堀田氏の京都警衛ご免、しかし交替がくるまでそこに留まれとの命令がでたとあるので、尚中は藩主と始終同行したとすれば慶応2年の初めに佐倉に帰ったであろう。藩の「御用留」によれば尚中の佐倉帰着は2月6日であり、ついで4月29日付で佐倉藩の京都警衛に際して、彼の地で病院をつくり、将兵の療養に主もだて骨折り、江戸へ帰るときも病人の手当がよく行き届いたので、御褒美として金貳百疋を尚中に給わるとの辞令がでている。

それから碑文の「藩主また先生の議を用い、医制を更革し、病院及び衛生館を建て、凡そ医に禄するものみな洋方を主とす」が実行の途につくのである。「御医師日記」の慶応2年12月7日の項に医制改革により、一等医師は佐藤舜海(尚中)ひとり、その席は側用人、俸給は30人扶持である。二等医師は倉次元意と浜野了元の2人、三等医師は岡本道庵、浜野宗仙、樋口文泰、那賀山洞春、西友輔の5人という辞令がでている。

「病院及び衛生館を建て」は佐倉養生所が尚中の建議によって慶応3年9月に仮養生所として出発したことを指すとおもう。医学所の改革はその前年であり、漢方を廃してポンペの式に7科を分けて医育をやるというので、根本的な改革であっ

た。明治政府の医学方針に先鞭をつけたものといえる。

上に引用した碑文の中にある幕府から尚中へ招聘の申し出があったが、断わったとあるのは篠丸氏によると「正倫年譜稿」に慶応2年10月3日「御用番井上河内守様へ御留守居御呼出、左之書公用人を以御渡

堀田相模守家来 佐藤舜海

右四日四ツ時西丸江差出す可く候 十月三日」とあり、これに対して佐倉藩では重臣の野村弥五右エ門が縷々陳情して、いま尚中を幕府にとられては、藩の医政改革、病院の設立など同人を中心に事を進めているので甚だ困る。「尤も一時の御用向にて候ハバ何時にても御差支なく御招呼差出シ申すべく候」と10月9日に歎願書をだして、それが10月27日に聞きとどけられたとある。

慶応元年の順天堂門人録

慶応元年(1865)といえは上記のごとく尚中は藩主堀田正倫に伴なって江戸や京都にでかけた公務多端のときであった。その年の閏5月に門人の信州飯田藩の石田子常が書いた「順天塾社中姓名録」と題した和紙9枚を綴じた小冊子が、本学所蔵の山崎文庫の中にあるのは実にありがたい。その前後に佐倉の順天堂で尚中を師として西洋医学を修めていた凡そ110人の名前が出身地と共に記されている。緒方洪庵の適塾や伊東玄朴の象先堂のごときは二、三十年にわたる存続期間を通じての門人名簿が残っているが、順天堂はそのような総門人録が今までみつからない(前には存在したらしい)ので、石田子常の書いたこの姓名録は甚だ貴重なものである。

慶応元年前後に門人として在籍したものが110人とすれば、泰然が江戸から佐倉に移った天保14年(1843)から尚中が維新政府に招かれて佐倉を去り東京に移った明治2年(1869)までの26年間に江戸時代の順天堂で泰然および尚中に学んだものの数は少くとも数百名に上り、あるいは千名を越えたかも知れない。

筆者の石田子常についてはまだ判明しないが、

姓名録の中ほどにみえる石田松庵と同一人であることは筆蹟よりほぼ確かであり、そこにペン書きで「亡父」と記した小紙片が貼られているので、松庵の子孫の家に残ったものにちがいない。それがどんな経緯で山崎佐博士の手に入ったかは不明である。

名簿の初めから約90人分は殆んど一気呵成に書いたものと思われる。それがおそらく慶応元年閏5月のことであろう。そのあとに続く20人はその後に入門した人たちであろうか、初めの90人分は楷書で読みやすいが、あとの20人分は崩した字で書かれ、いかにも余白に書き加えられた感じである。その他にやはり余白を利用した形で存誠齋社中(林洞海の塾であろう)11人と〇〇樓社中4人の名が出身地と合せて載っている。この15名は順天堂とは直接の関係が一応ないものとしておこう。

110人の名前の全部を列举することは別の機会にゆずるが、最初に下総佐倉藩として西友輔(塾頭)、岡本道安(塾監)ら8人の名が列び、ついで妻木立斎、勝沢一字ら5人がみな越前福井藩の者として列ぶ。国別にしてみると、越前が全部で16名で地元の下総(12人)を凌いでおり、上総は飯野藩の1人にすぎない。土地の遠近には関わりなく全国から集まっている。九州は6人、四国は4人あり、北のほうは松前藩の1人がある。九州人の中で佐賀藩の相良元貞と同藩の永松東海はともに会頭の肩書がついている。本州の分を今の地方別でみると、中部地方が36人、関東地方が27人、東北地方12人、近畿と中国地方がそれぞれ7人となる。中国のうち山陽が5人と山陰が2人である。すなわち全国的な広がりを示している。

注目すべき人物を拾ってみると、塾監の岡本道安(庵の誤りか)は明治の初め尚中の養子となり佐倉の順天堂を継いだ佐藤舜海である。また佐藤一門のものは載っていない。佐藤進は養子になる前だが尚中の義理の甥である故か名がみられぬ。

越後長岡藩長谷川泰一郎は後に明治の医界で大活躍する長谷川泰である。彼は済生学舎をつくって数多くの実地医家を養成した。佐賀藩の相良元

貞は文久年間に順天堂の塾頭をつとめ、攘夷の浪士が順天堂を襲ったとき、説得して追っ払った話が残っている。彼は明治の初め日本政府がドイツ医学を採用に決したときの立役者である。その他米沢藩の磯野恒徳や上記の永松東海など明治の医界で大きい働きをした人びとの名がみえる。

また志州鳥羽藩の安藤堯民は尚中が若いとき江戸で師事した安藤文沢の息子とおもわれるし、終りのほうにある石州津和野の森静泰は森鷗外の父森静男のことである。

「順天塾規則」と講義日程について

上記の姓名録にはやはり石田子常が慶応元年閏5月に書いたと思われる順天塾規則が付記されている。

「一 吟詩唱歌

一 碁将碁

一 外宿

一 諸物乱用

一 禁史卑稿(つまらない小説などを読むこと)

一 飲酒

右禁止

右の条きつと相守り申すべき事。

一 塾中の諸事は都講の命に相従い申すべき事

慶応改元丑4月 日 順天塾執事」

とある。いまの学生のみでなく教員も驚くほどの厳格さである。もちろん塾内ではやっていけないの意であろう。都講は教授職に次ぐもので、ここでは誰れを指すのか明らかでない。

つぎに講義の時間と教科書などのことが載っている。まず「先生御講義」とあるのは尚中先生にちがいない。「昼前隔日」とは一日おきに午前中に尚中が雲埜児理伊(ウンテルリイ)と明百(ボンペ)の外科書を原本で講義するのである。ウンデルリイは前に述べたドイツの著名な内科医ウンデルリッヒ C. A. Wunderlich (1815-1877) である。尚中が長崎でその蘭訳本を訳して略血勞瘵篇をつくったことを前回に書いた。Wunderlich の内科書と長崎養生所のオランダ医官ボンペ Pompe van Meerdervoort 外科書を隔日に午前に講じたとす

ると、毎日午前となるのか、それではいくら勉強家の尚中でも負担が多すぎるとおもう。一日おきにこの内外科両書からだいたい個所を講ずるの意であるまいか。

つぎの菲児篤児(ヒルトル Hyrtl) 解剖書と私篤灰剝児土篤(ストックハルト Stockhardt) 舎密書を佐賀の相良元貞会頭がうけもっている。ヒルトル解剖書は一、四、七の日で午牌升堂は昼の12時から始めるの意であろうか、舎密書すなわち化学書は三、八の日で午後6時からの夜学ということになる。

つぎに明百(ボンペ)の人身窮理書すなわち生理学が二、六の日で昼の12時から、同じくボンペの解体書が一、四、七の日で、これは時刻が書いてない。一、四、七は相良がヒルトル解剖書をする日と一致している。ボンペの人身窮理書と解体書は会頭永松東海の受持である。医学七科が尚中および主な門人により分担して講ぜられたことがわかる。また会頭の西友輔が五と十の日に綱帯会をやり、三と八の日に和蘭文典をうけもっている。

今のように週による分け方はボンペが長崎では用いたが、まだ日本の全体で通用しない。この講義時間表でみると九の日は講義がないようだが、尚中先生の隔日講義というのがあるから、特に休日は定めてなかったのであろうか。

佐倉藩の医学所は成徳書院の医学局として天保7年10月に初まった。初めは漢方のみであったが、鏑木仙安が蘭方を学んで天保13年の暮に佐倉に帰り、さらにその翌14年に佐藤泰然が藩主堀田正睦に招かれて佐倉に移り順天堂を開いてから、次第に蘭方の勢力が増していった。泰然の推薦により三宅良斉も天保15年に藩医となった。

嘉永元年(1848)からは医学所と称せられて書院からはかなり独立の立場となり、ついで金井右膳が医学所の総管を命ぜられて、蘭方重視の傾向がいっそう増したといえる。尚中の長崎留学もこの右膳がもっぱら後楯てをなしていたことは前述した。医学所の内でも漢方と蘭方の対立があったので、嘉永2年には「……医術は人命を救ふ大切の業に之ある所、流儀家法を唱え、面々意見を立

て、相互に蔭にて誹謗いたす類は素より面々の為にもならず、病氣にては迷惑いたす筋に付、向後漢蘭毎隔意なく相互に得意の筋明白に相談を遂げ……」と大目付から藩医たちに命令がでている。漢方と蘭方のものが相争わず仲よく相談して治療にあたれというので、佐倉藩としては漢蘭折衷の立場をとったといえる。

ちょうどこの嘉永2年にジェンナー発明の牛痘接種法が長崎で成功し、すぐ全国的に広まって佐倉藩でも実施されて洋方医の勢力が加わった。その年12月には「佐倉子育方役所」から木板刷りの種痘教諭書が領内の各地に配布された。これには泰然を主脳とする順天堂の貢献が大であったとおもう。嘉永3年2月から医学所で牛痘接種がさかに行われたようである。藩医の地方巡回もあった。

安政6年には再び医学所の改革があって、「漢法にても蘭方にても各望の方一方を相学び申すべく候、必竟治療さへ精巧にでき候得ば宜しきにて、漢蘭の名目に拘り候儀には之なく、……」とある。文久2年9月には漢方医も西洋療治を学ぶことのお達しがでて、そして慶応2年にいよいよ尚中の議を容れて佐倉藩は洋方のみをとることが決定した。藩医から漢方が締めだされることになった。明治前の諸藩の中でこの英断をなしたのは佐倉藩だけとおもう。藩医に一等、二等、三等の3階級をつけたのも極めて特殊なやり方である。

慶応2年の門人帳

尚中は門人にも成績により等級をつけたのである。尚中の自筆で丙寅（慶応2年）に書いたものが、いま私ども順天堂史編纂委員会に蔵されている。故佐藤亨博士（尚中の孫）より譲られたのである。

まず塾監として、岡本道庵と西友甫の2人、ついで第1級が中村斎と木原逸斎の2人、第2級は長谷川泰一郎、山本淳良、高和介石（後の佐藤進）、三竹善民、中根退蔵、嶋田帰一の7人、第3級は吉村陽庵、三好隆玄、小田舜泰、森里謙蔵、森松道圃、渡辺万次郎、浅井恭甫、妻木立斎、安

藤堯民、磯野恒徳、馬嶋了達、鈴木隆斎、飯坂信庵、窪田堅蔵、山鳴直平、奥村祐斎、小林良哉、石坂玄基の18人、第4級は相磯敬三、梁田東洲、長内厚篤、佐郷谷冲琢、和田栄軒、長岡東園、清水恭徳の7人、無級が嶋田鋼蔵、海保春蔵、平塚五朔、中村判次の4人、それに譯訳生として篠田直安1人の名がある。

合せて41人であり、そのうち38人は前年閏5月の姓名録に載っているの、その間に退塾したのは72人（高和介石を除くと71人）となる。塾頭であった佐賀藩の相良元貞（知安）と永松東海も順天堂を去ったようである。前述の石田子常（松庵）の名もみられない。新しく入門したらしいのは無級の海保春蔵1名にすぎない。それも改名していないとしてである。この減少は幕末の政情不安を反映しているとおもう。

門人の名前を階級を付けて列挙したあとに「丙寅季春相定る也。但し塾法は治療をよくなさんとて原書を読ことなればあなかに原書の力のみにて等級を定むへからず。療術たくみなる時は吾職に恥さらまし。さりとて原書によりてその道を探らざる時は妙処にはいたりかたかるへくなん覚へぬ。等級中なかには原書のこと丈人の升りたるも見へつれと治療の工拙によりてあらかしめかくなん定めぬ。近日いとまあるをりを見てみつから業の優劣を試みつらん。諸君勉強を旨となしてその日を待れかし。尚中白」と書いている。

慶応2年の季春（3月）といえば、尚中が藩主のお伴をして前年の9月から京都に滞在して、佐倉に戻って間もなくのときである。数カ月の不在のあいだに時局の影響もあり弟子の数が減じたことが推察できる。そしてこの文を読むと順天堂では蘭書を読む力よりも医術が上手であるかどうかにかんがいを重きをおく、蘭書を読むのはただ医術の向上のための手段であることをはっきり述べている。近日にその試験をするつもりだとある。その年の末に尚中の建議が用いられて佐倉藩の医制の大改革がなされ、彼が一等医師として佐倉養生所の主宰者となるが、そこでも順天堂の塾生に対すると同じく、良医をつくる主義で蘭書を読むのはその手

段としていたにちがいない。

高和介石を養子(佐藤 進)とする

養生所の仕事が緒についたと思われる慶応3年3月12日に妻サダが病没した。佐倉藩の年寄部屋日記の3月12日の項に

「佐藤舜海達。私妻病気の処、養生不相叶、今卯下刻死去仕候。依之、定式の忌服左の通受之、今日より引込候由、

忌二十日(3月12日より4月2日まで)

服九十日(3月12日より6月13日まで)」とある。しかし大事なときでそんなに引込んであるわけにゆかなかったとみえて、3月20日の項に

「佐藤舜海忌、被成御免候間、明廿一日より出勤可有之の旨、今夕当番一名差遣候」とある。

その後すぐの3月23日の項に

「招呼佐藤舜海、御自分相続の男子無之に付、内田主殿頭様御家来、高橋庄太郎と申者次男進儀、当卯式拾三歳罷成候。此者養子仕、娘江取合申度内証申合、願書の趣、達御聴候処、願の通被仰付」とある。

その前に2月18日の項には

「浜野了元相招、佐藤舜海相願候、私嫡子統三郎退身仕候ニ付、次男百太郎儀、嫡子仕度段可奉願処、此者近来病身罷成、三男哲次郎(後の大野伝兵衛)は幼少の上、虚弱にて、兩人共往々家業可勤体、無御座候に付、相応の者養子仕、家業相続為仕度段」と願いでて藩主の許しを得たことが載っている。そこではまだ誰れを養子にするとは書いてない。

3月23日に初めて養子佐藤進の名がでていゝ。しかも小見川藩主内田主殿頭の家来高橋庄太郎の次男進とあるのは、常陸太田の高和氏は商家であるため、この面倒な手続をしたものとおもう。実際には妻サダの姉の子であるから、義理の甥を順天堂の家業を継ぐ養子として迎え、長女シヅに配したのである。多くの伝記では進が佐藤家の養子になったのは慶応2年とある。藩への正式届出が3年となったのであろう。

その佐藤進は3年10月18日には三等医師となり

金1枚、米5俵をうけるが、10月28日の項に「招呼佐藤進、御自分事、上々様伺被_レ仰付_一候」とあるのは藩主の侍医となったことであろう。また12月19日の項に佐藤進は「医術上達に付拾人扶持被_レ下置、給人被_レ召出_一、第二等医師被_レ仰付候」とあり、藩医としての地位が急に昇進している。

佐倉養生所について

慶応3年9月に出発した佐倉養生所の内容に関しては、青菅村(いま佐倉市の一部)の名主半左エ門ほか26名が連印した文書が篠丸頼彦氏に所蔵されていて、それにより次のことがわかる。この書類はまず西洋医術が漢方よりも確実にすぐれているので、こんどできた養生所はその西洋医術を実施して藩民の病苦を救うためのものである。

「……今より病にかかる者は其軽重にかかわらず養生所に罷出、診察を受、調薬を願ふべし。時宜によっては直様にも病院江寄宿いたし、薬用いたす様いたすべし」とあり、外来も入院もできるとしている。

「若し貧民共手少にて薬用行届かね打臥おる輩は駕籠、釣台などにて荷ひ来らばすぐ様病院江取り、看病人まで下し置かれ、療養手当十分にいたし遣すべく間、懸念なく願出べし」とあり、入院の手続きは村役の添鑑一つがあれば結構で、外来だけならその添鑑も要らないという。「総て人民お救ひの為」であるから、なるたけ手軽に取扱う方針である。

養生所では一等医師老人すなわち尚中が「毎日朝四ツ時(10時)頃より九ツ時(正午)前後まで相詰め退出、去り乍ら、病人多の時は八ツ時(午後2時)すぎ七ツ時(午後4時)までも相詰候、養生所江出候病人は残らずあづかりにて治療いたし候事」とあり、尚中が病人を全部みるとしていることが注目される。

二等医師二人は「毎日老人づつ五ツ時(午前8時)ごろより出勤」して、一等医師と同時に退出する。一等医師が差し支えて出勤できないときはその職務を代行するし、また頼んできた御家中の病用をも勤める。

三等医師は「毎日兩人づつ五ツ時（午前8時）ごろより出勤」して、一等医師が退出の後は養生所の病人をみるし、急病人が頼んできたときは2人のうち1人が伴をつれて往診治療にゆく。一等医師が退出のあとは（二等医師は一等医師と同時退出だから）三等医師が養生所の「全権を握り申すべく、夜中兩人泊り、翌日一等医師出勤の上、交代致すべく候事」とある。つまり三等医師は2人づつ宿直し、その間は養生所の全権を委せられている。佐藤進は10月18日に三等医師になり、12月19日に二等になったので、その間は他の三等医師と共に宿直をしたはずである。

その他の職員として看病人頭取4人（内当分2人高）、調合方6人（内当分4人高）、同見習（内当分4人高）、三等医師並6人（当分欠）、養生所

総取締役1人、同調役1人、同薬種掛6人、同子供6人、看病人16人（是は病人入院の上追々召抱られ候）、下番・使番・飯焚中間4人とある。

せっかくの養生所も維新の動乱のため永続せず翌慶応4年の閏4月28日「年寄部屋日記」に「佐藤舜海達、養生所当分の内、相止められ候につき、今日役々引払候由」とあり、創設後わずか半年あまりで中止となっている。

養生所での診療は無料であったようである。しかし「入院病人飯料は上納相成り候間、兼て相心得らるべく候こと」とあり、入院患者の食費は上納させたとおもわれる。養生所の医者が往診したときは其模様次第で薬価を払っても払わなくてもよいが、その医者へは「銘々より相当の謝礼いたすべく候」とある。